西村　登，1985，ヒゲナガカワトビケラの生態．インセクタリゥム，Vol.22，No.8:20-27.
西村　登・原　昌久・山本一幸，（未発表），久斗川水系の水生動物．
山本一幸，1986a，久斗川でのヒゲナガカワトビケラ成虫の遡上飛行．兵庫陸水生物通信．No.23:1.
———，1986b，久斗川でのウグイの産卵．同上，No.23:2.
———，1986c，ヒゲナガカワトビケラの羽化．同上，No.25:1-2.
湯浅義明，1986，ヒゲナガカワトビケラの蛹化．同上，No.24:1-3.

ウデブトハエトリ雄のfighting display

山本一幸

ハエトリグモ科 Salticidae の雄同士が対峙したときにみられる行動は興味深く，横浜や房総半島の周辺では，ネコハエトリ Carrhotus xanthogrammma の雄を闘わせ，その勝ち負けを競うことが娯楽の一つになっていた(川名・斉藤，1985).

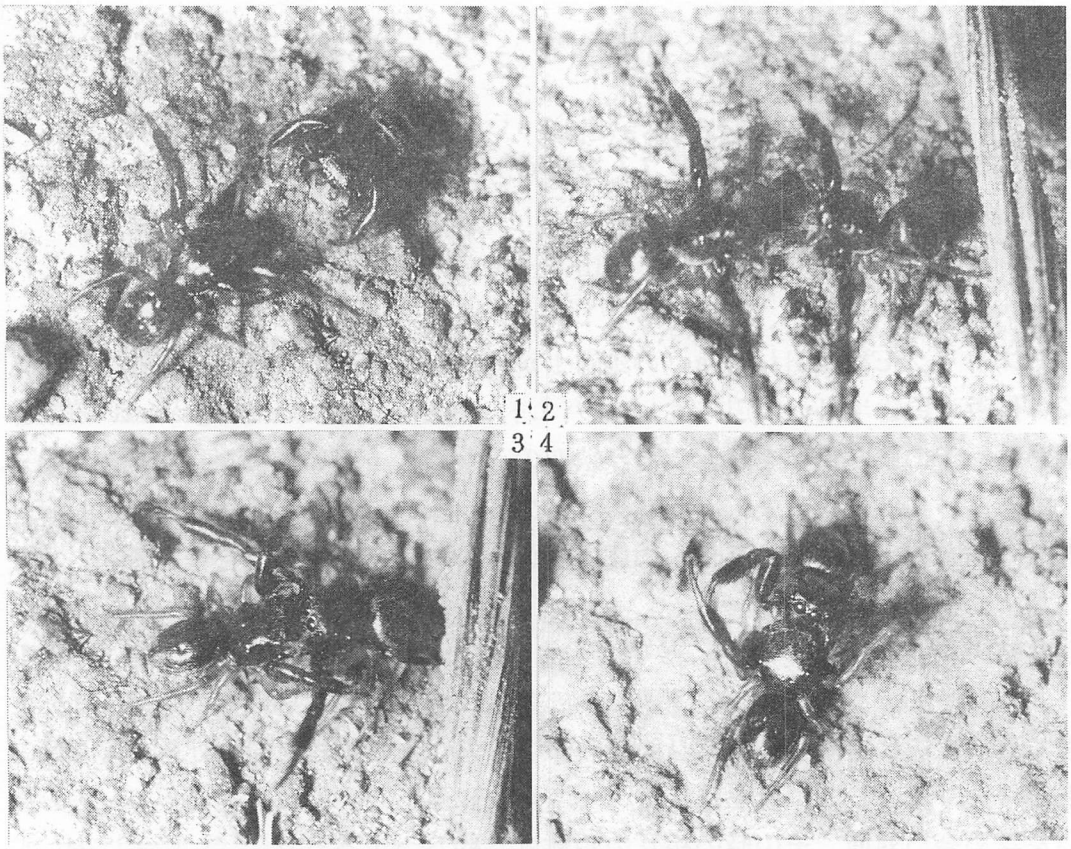
筆者は，1986年５月末，浜坂町久斗山の我が家の庭先で，偶然にウデブトハエトリ Harmchirus brachoatus の雄同士の争いを観察したので報告する.

観察結果

① 18時30分ごろ，庭先の花壇の中の筒状に巻いた落ち葉の上で，第１脚を大きく真横に広げて向かい合う２頭のウデブトハエトリの雄を見つけた．落ち葉の上から振り落として両者を離した． ② 地表に落ちた両者は，しばらくしてお互いを認め合い対面．その時の相互の距離は，約３cmであった． ③ 両者は少しず

つ接近し，約1cmまで近づいたあたりで，片方が第1脚を逆八の字型に前方に突き出し（写真1，左側），威嚇するようなしぐさをした．④ もう一方はやや退いたが，同じように第1脚を突出し，約30秒ほどにらみ合いが続いた．⑤ やがて両者は少しずつ接近し，距離が縮まるにつれて，前方に向けられていた第1脚をほぼ真横に伸ばし，それと共に触肢や上顎も大きく広げた（写真2）．⑥ 上顎が接触するギリギリまで接近し，頃合を見計らって組み合った（写真3）．そのとき上顎はガッチリ噛み合っており，斜め前方に向けられた第1脚は，やや下向きに曲げられ，交差し合った．⑦ 互いに第1脚を使い，相撲で言う“上手”をとりあうかのように，激しいせりあいがしばらく続き，初めに威嚇した方がやや押され気味になった（写真4，手前の雄）．⑧ 急にパッと離れ，押され気味だった方が逃げ出し，勝敗がついたようであった．人為的に対峙させても，敗者はすっかり逃げ手にまわり，再び対戦することはなかった．

以上，①～⑧ の所要時間は10数分であった．



考察

井伊(1972)によるアダンソンハエトリ Hasarius adansoni の誇示行動は，大きく次の４段階に分けられており，今回観察したウデブトハエトリについても当てはめてみることができる．

A　注視期 ---------- ②
B　第１段階　接近 ---------- ③
C　第２段階　闘争前段階 ---------- ④，⑤
D　第３段階　fighting　闘争 ------- ⑥，⑦

しかし，細部の行動様式はかなり異なり（アダンソンハエトリの場合，Bにおいて左右の屈伸運動がみられ，Dにおいて第１脚だけでなく第２脚・触肢も横に伸ばし，バタバタと激しく打ち合う．また，全過程の所要時間は30秒以内と非常に短い），どちらかと言えば，川名・斉藤（1985）によるネコハエトリの行動様式に似ている．勝敗は，ネコハエトリの場合，第１脚先端で腹部背面をひっかくことで決まるようであるが，ウデブトハエトリの場合，何が決め手になっているか確認できなかった．

後日①の落ち葉を開いたところ，雄と雌が仲良く同居していたことから，雄同士の争いの原因が雌をめぐるものであったことを察した．争いの原因について，ネコハエトリの場合，川名・斉藤（1985）は求愛行動との関連性を指摘しており，雌の巣をめぐっての雄間闘争が頻繁に生じていることを述べている．今回の観察だけでウデブトハエトリの争いの原因を結論づけるのは危険であるが，雌への求愛と何らかの関わりがあるものと思われる．

末筆ながら，本報を書くに際してお世話になった本庄四郎氏にお礼申し上げる．

参考文献

井伊伸夫，1972．ハエトリグモの誇示行動(1)　アダンソンハエトリ雄の threat display. ATYPUS, No.59:20-25.

川名　興・斉藤慎一郎，1985．クモの合戦　虫の民族誌．未来社．東京．

八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑．保育社．大阪．